

## What Is a Man?:

### The Collapse of the Boundaries in Shakespeare's Plays

要旨

廣野 允紀

本論文では、シェイクスピアの三つの劇作品、『ヘンリー六世・第二部』、『ジュリアス・シーザー』、『コリオレイナス』を扱う。これらの作品ではすべて、民衆の残虐性や暴力性が描かれている。また、人間と動物の境界線と社会階級間の境界がこれらの作品内で密接に結びついており、民衆の描写はこれに大きく影響を与えていると考えられる。本論では、こうした境界線と民衆の関係性の考察を通して、初期近代イングランドの貴族が抱く社会階級の不安と人間の曖昧で不安定な境界線をシェイクスピア作品に読み取ってみたい。

第一章では、社会階級と「人間」の概念がともに崩壊していく初期近代イングランドの背景を確認する。シェイクスピアの時代、人間と他の動物は完全に異なっているという人間中心主義が深く根づいていた一方で、人間であるにもかかわらず、曖昧な定義によって獣のように扱われる人々が存在していた。また、中産階級の台頭により、イングランドの階級制度は大きく揺れ動くことになってくる。人間と社会階級のこうした不安定な境界線が、シェイクスピア作品の中で密接に結びついているのである。

第二章では『ヘンリー六世・第二部』に焦点を当てる。この作品では、貴族間の党派争いや、その野心が動物のイメージで表されており、貴族たちは、互いに醜く、野蛮に争いながら、社会的地位と人間性を同時に失っていく。この劇では、貴族と貧民、そして人間と動物を隔てる衣服と教育の機能の崩壊が、ケイドの反乱の中で描かれている。境界線が崩壊したイングランドで、貴族も民衆も獣のように争うのである。

第三章では『ジュリアス・シーザー』における人体の脆さが議論される。ブルータスたちはローマの強力な民衆の中で自身の社会的地位を保つために、儀式や狩り、解剖のイメージの中でシーザーの身体を破壊する。劇の序盤、気まぐれな民衆に神の如く崇められていたシーザーは、暗殺後、獣や死体に変容する。シーザーの身体のような変化は、初期近代における人間と動物の不明確な差異を表象していると考えられる。不安定な社会の中で自身の地位を安定させようとする貴族の姿と、人間と動物の身体の間にある不明瞭な差異をこの劇は描き出しているのである。

第四章で扱う『コリオレイナス』では、貴族マーシアスの没落が、人間と社会的地位に必要な「声/票 (voices)」と「直立する/立候補する (stand)」によって描かれている。これらはマーシアスにとって執政官に立候補するために必要である一方で、同時に、初期近代において人間と他の動物を隔てる重要な要素であった。しかし、マーシアスが固執する血統や名誉は民衆や母親に作り出された不安定なものであり、この事実がマーシアスを曖昧な境界線に誘う。ゆえに、執政官の立候補に失敗したマーシアスはローマでの地位も人間性も失ってしまう。『コリオレイナス』は、ジェームズ一世時代の爵位の価値の低下と、人間と動物を隔てる曖昧な要素、‘voices’ と ‘stand’ を貴族マーシアスの没落の中に描いているのである。

本論で扱った三つの作品全ては社会階級と人間性の境界の崩壊と結びつきを描いている。存在の大いなる鎖と政治的身体、社会階級の重要性を人々が強く信じていた時代に、シェイクスピアは流動的で不安定な社会階級に不安を抱くエリザベス朝貴族の姿と崩れ始めた人間中心主義を作品の中に刻み込み、「人間とは何か」とわれわれに問いかけているのである。